

# ペシャワール会報

No.31



ペ  
シャ  
ワール  
会  
電  
話  
・  
F  
A  
X  
一  
二  
五  
〇  
九  
二  
七  
三  
一  
二  
三  
七  
二

〒  
810  
福  
岡  
市  
中  
央  
区  
大  
名  
上  
村  
第  
二  
ビ  
ル  
三  
〇  
七  
号

- 変貌 らい病棟の女たち 完.....中村 哲
- 故佐藤雄二事務局長を悼む.....中村哲/安陪光正/辻睦雄/シャワリ・ワリザリフ
- 二ヶ月ぶりの「わが家」.....林 達男
- ワイワイと集団訓練.....島村教子
- 大きい言葉の問題.....松本智子
- 新らい病棟完成で多忙なスタッフ.....藤田千代子
- ペシャワールの地を訪ねて.....栗林由美子/岡本久子/福元満治
- 新病棟完成セレモニーに出席して.....板垣徹也
- [神・泥・人] カーペット.....甲斐大策
- 世間意識からの解放 [増補版「ペシャワールにて」を読んで].....阿部謹也

表紙絵\*真鍮細工の店 甲斐大策

ペシャワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています

# 変貌

らい病棟の女たち 完

JAMS(ジャパン・アフガン・医療サービス)顧問医師  
ペシャワール・ミッション病院医師

中村 哲

## JAMSの活動開始

一九八七年二月、長らく我々の恨みであった「アフガニスタン」への足掛かりが作られた。日本側の全面支援によるアフガン・レプロシー・サービス(現JAMS II日本・アフガン医療サービス)の難民キャンプへの活動開始である。当時アフガン戦争の真只中で、越境する難民は北西辺境州だけで三百万人に迫りつつあり、らいコントロール計画はその影響をともに被っていた。らいは現在では治る病気であるが、結核以上に長期の服薬を必要とし、治療中断による再発は取り返しのつかぬ結果を生み出すからである。こうして、我々の治療下にある多数のアフガン人患者もこの果てしない内乱の犠牲となっていた。

例のハリマという女性患者も現にその一

人であった。第二、第三のハリマが多数いるに違いない。国境沿いの難民キャンプを狙い撃ちに、治療中断者と新患者を見いださねば「らい根絶計画」の成功はおぼつかなかった。同時に国境を越えて次々と現れるアフガン人の未治療患者の対策も痛感されていた。ハリマの姿がアフガン人患者問題をも身近にし、決断に踏み切らせる一つの動機づけになったのは事実である。

## ソ連軍以上の厚い壁

一九八六年の夏、私は帰国の間をぬって、この「アフガニスタン計画」の具体化のために飛び回っていた。具体的には、このための財政技術援助である。

親身に関心を示してくれる者は少なかった。その時の自分の有り様は、わが子を救おうとして他人に必死で懇願する親の姿に



テメルガールの診療所の前で隣人と話す中村医師

似ていたであろう。確かに「他人」にしてみれば、厚かましい話ではあった。だが、日本社会の持つ特有のゆとりのなさは、ソ連軍以上に圧倒的な壁であった。好意を持つ者でさえ身動きがつかなかった。マスクミを含め、多くの人々にとって、ペシャワールでの医療活動は美談以上のものではなかった。

美談と取られるのはまだ良い方だった。刺すような皮肉にも耐えねばならなかった。「好きなこと」をして結構な身分だな。日本じゃ皆結構苦しいんだ」

「日本だって困ってる人はいくらもあるんだ。何もこと変わった所で」

「そりゃあ、立派なことをしているとは思うよ。しかし世間ってものは……」

「俺たちや、税金を払っているんだ、外務省にでも相談したら」

折から国を挙げて国際化の呼号される中、少しは義侠心に燃える変わり者もいてよさそうだが、案外世間一般の風当たりは冷たかったと思う。その通り、私は好きなことをしてメシが食える「結構な身分」であり、「こと変わった所」でオロオロしている物好きな人間に過ぎなかった。売名行為と評するゲスの勤ぐりや、訳知り顔に人生訓をたれる空疎な自信に対して憤り心頭に達しても、ただ黙っていた。怒りをぶちまけて手を洗うのは簡単だ。しかし、ペシャワール現地の不利になってはならなかった。

### ある大学教授の『忠告』

共感を示すものは一般に国内の活動にも忙殺されており、善意が力となりにくい構造的な壁を感じた。こんなこともあった。必要物資の輸送に手を焼いていた折、たまにイスラマバードに派遣されていたJICA

C A (国際協力事業団) 関係の医師が、「少量の荷物ならば私の荷物に混ぜて送られます。遠慮なく私の大学の先生に連絡をとってください」と申し出た。渡りに舟で、この医師とJICA職員の厚意に心から感謝した。だが、帰国後直ちに連絡を取ったところ、意表をつく返事が帰って来た。「先生のご活躍は存じております。なされていことは誠に立派と存じますが、



女性病棟で患者さんと話す中村医師

私共は密輸の手伝いと受け取られるような真似は致しかねます。……ところで先生の書いているものを見ると、時々怒っておられますね。パキスタンにもちゃんとした医師は沢山いますよ。現場の人と共に歩む姿勢を忘れてはいけませんよ」

薄っぺらで無用な忠告である。何のことが良く解らなかったが、自信たっぷり口の調だった。私は、いやしくも一大学の教授たる者の調子はずれな訓示に驚くと共に、この筋の大方のレベルを知った(その後、この教授とは二度と連絡を取らなかつた)。国際協力も所詮、日本にあつては井の中の蛙と猿山の大将が跋扈する、摩訶不思議なサロンでなければお祭り騒ぎに変身する。奇妙な世の中になったものだと思つた。

### 絶望から生まれるもの

しかし、いつの時代でも、我が身を削つて人に与えることを喜びとし、殺伐な世相に明るさをふりまく「変わり者」がいるものである。画期的な先鞭をつけたのは、名古屋のサウス・ライオンズクラブと福岡徳洲会病院である。名古屋のグループは一九八五年にアフガニスタン難民救援アクトと

して現地訪問、実情に自ら触れて奮い立ち、一九八六年、その三十周年記念行事の一環でアフガン人チームのためのセンター建設と車両の寄贈を申し出た。九州の徳洲会病院グループには元々離島などの医療過疎に情熱を燃やす者が集まっていたが、医療過疎の極致ともいべきペシャワールの事情に素朴な同情を寄せ、ミッション病院らしい病棟の改築と継続的支援を買って出たのである。さらに、国立療養所邑久光明園グループが、らいに熟達した皮膚科・整形外科・眼科専門医・検査技師を伴ってペシャワールに一時滞在、本格的な技術改善に乗り出した。これらの人々は当然の如くこれら自分の喜びとし、何の理屈も、何の国際協力論も述べなかった。

これを後ろ盾に、アフガン人チームの編成が成り、彼らも総力を挙げて「らいのアフガニスタン難民問題」に取り組むことが可能となった。実に一人のらい患者の悲痛な叫びが、次々と良心の連鎖反応を呼び起こし、アフガニスタンへの抜本的な対策・発足を実現させる強い推進力となったのである。この事実は、本人を含めて誰も知る由がなかった。

私は拙い表現の中に真実を、正当な論理の中に驕りを、耳ざわりのよい修辭に偽りを、発見しようとしていた。我々の協力が真の意味で「共に生きる」ということであれば、私は彼女たちに感謝しなければならぬ。そこで我々が人間を発見し、その何たるかを肌で理解できたからである。

変貌したのは、ハリマというらい患者のみではなかった。我々もまた彼女によって変えられたからである。絶望から希望が生まれようとしていた。



一九四六年福岡市に生まれる。一九七三年九州大学医学部卒。一九八四年バキスタンのペシャワール・ミッション・ホスピタルに赴任。らいの

コントロール計画を柱にしたアフガン難民の診療に携わると共にJAMS(ジャパンアフガン・医療サービス)を設立。長期的展望に立ったアフガニスタン無医地区での医療活動をめざしつつ現在に至る。著書に『ペシャワールにて』(石風社)『ペシャワールからの報告』(河合文化研究所)がある。

**(JAMS 診療報告)** (1991年10月1日～1992年2月29日)

◎フィールドワーク	尿検査	2,489件	退院患者数	124名
訪問難民キャンプ 8ヶ所	便検査	2,783件		
(小、中学校2ヶ所を含む)	ツベルクリン検査	129件	◎テメルガール診療所	
診療患者数 のべ1,518名	脳波検査	5件	外来患者数	のべ2,453名
	心電図	196件	マラリア検査陽性	322件
◎検査	X線	608件	血液検査	1,121件
血液検査			尿検査	629件
エコー検査	◎ペシャワール診療所		便検査	704件
化学反応検査	外来患者数	のべ10,406名	ライ菌検査	140件
らい菌検査	入院患者数	156名		

# 故 佐藤雄二事務局長を悼む

昨年十二月九日、ペシャワール会の要とも言える佐藤雄二事務局長が亡くなりました。中村先生にはもとより、ペシャワール会事務局長の大きな心の支えであった佐藤先生のご逝去を心から悼むと共に、先生の残された大きな礎を継ぎ、更に発展させて行きたいと思えます。佐藤先生、安らかに眠り下さい。

## 故 佐藤君を懐う

中村 哲

故佐藤雄二先生は、小生が九大医学部に昭和四一年に入學して以来の親友で、彼の兄さんの佐藤誠ご夫妻とも古い親交をさせていたかったです。学生時代は九大YMCAの熱心な会員であり、彼を通して現ペシャワール会会長の間田直幹先生（当時九大医学部長）とも知り合いました。卒業時と同じ肥前療養所で、精神科の学びを共にしたことがあります。一九八三年四月にペシャワール会準備会が結成される際に、奔走してその任に当たられたのは故人及び佐藤誠ご夫妻でした。以来九年、佐藤雄二先生は多忙な病院勤務の合間をぬって事務局長として背後から我々の働きを支え続けてくれました。

私が以前所属していたJOC S（日本キリスト教海外医療協力会）と現地活動との間で苦心惨憺しながら調整役をしていたのも彼でありました。これで行内のことには彼に半ば任せ、心置きなく現地ペシャワールでの医療活

動を積み上げることができたのです。

今また現地活動が発展的な節目を迎えるに当たり、佐藤誠夫人の赫子さん、そして予想だにせぬ雄二君の逝去に遭遇し、ほっかりと穴の空いたような空白感を覚えずにはおれません。人がどのように故人の生涯を総括し、いかに修辭を以て死の意味を語ろうとも、一つの虚脱感と悲しみでオロオロするのが正直な所です。



故佐藤雄二事務局長

彼が日本で死の床につく直前、私はアフガニスタンの山中に入り、まさに積年の大目標であった国内診療所開設にこぎつけようとしていました。一九八八年に彼がペシャワールを訪問してから三年半目でした。ヒンズーク

シの輝くような純白の大山脈が我々を迎えてくれました。

地上での惨憺たる人の営み——戦乱による破壊と飢餓、何百万人もの犠牲の意味を考えました。これを無駄死にだと言う気にはどうしてもなれませんでした。だからこそ、だからこそ、我々ペシャワール会の活動があるのだと自分に言い聞かせました。これらの犠牲の意味は、あの白い峰々の放つ清純さとなつて我々を誘うような気がしました。

これも生き残った者の勝手な感傷に過ぎないのでしょうか？ 私には分かりません。だが、弔いを力に変えることはできません。そして、平和と建設に励むことによって、人の死をも我々の豊かな糧とすることが許されているのだと思いました。

ペシャワールに帰って佐藤君の訃報にふれました。彼の死は、私にとって、これら数百万の犠牲の意味と交差するものでした。先春亡くなられた佐藤赫子さんも、死ぬ前までペシャワールでの働きを一つの慰めにしておられたことを思い出します。あと何年か分かりませんが、生きている限り、残される者の定めとして、我々の活動は営々と続くでしょう。そうしてこそ、故人の死も地上で無駄には終わらないのだと思っています。今でも私は彼の柔和な笑顔が心のどこかに焼き付いて、話ができそうなほど近くに感じます。

佐藤君の霊が天上で安からんことを祈りませぬ。

## 佐藤雄二君を悼む

医療法人浜江堂油山病院副院長

安陪光正



ペシャワールにて(1988年4月)

中村哲医師らのパキスタン北西辺境州ペシャワールでの、ハンセン病を主とする医療活動が一九八四年以来つづげられ、今日に至った。その支援母体がペシャワール会、佐藤君はその事務局長として会報発刊、募金運動の中心であった。中村、佐藤両君は九大医学部の同級生、積極派の中村医師・穂健派の佐藤君は二人三脚の名コンビであった。ペシャワール会発足以来すでに八年、現在会員千五百を数えるに至ったが、これひとえに君らの努力におうものである。

昨秋君の配慮により、帰国中の中村医師を私たちの油山病院に迎え、現地での活動をお

聞きした。日本と風俗習慣を異にするペシャワールにおいて、その国にふさわしい医療活動のむずかしさを伺い、感銘を深くした。わがことのみに汲々たる私たちにとつて「自分が人のために何ができるか」と問いかげられる思いであった。「一家そろって押して動かなかった車が、あとからチョコチョコついて来た末つ子の加勢で動いた」

との寓話があるが、私たちも車押しの一にならうと決意した。君は常に車引きの先頭に立ち、会のリーダーであった。

佐藤君の専門は老人精神医学の臨床と病理である。君は老人応接の基本として

一、言葉使いをいいねいに、大きな声ではつきりと、近くから、ほほ笑み、目を合わせ、時には手や肩に触れながら話す。

一、つじつまの合わない話にも耳を傾け、決して馬鹿にしたり、頭ごなしに否定しない。

一、失敗行為をいちいち指摘しない。叱らない。プライドを傷つけない。

などを挙げ、それを信条として病者に接した。患者さんから慕われるわけである。他方君は、老年期痴呆患者の脳研究の最先端を歩き、数々の業績をあげた。君は臨床と脳病理に深い造詣を持ち、数少ない正統的学究の一人であった。

前途洋々たる君は、癌発病以来一年にして、四十三年の生涯を足早に歩み去った。君は最初から癌であることを知り、かつ寿命をも悟っていた。日々を死と相対し、あるいは落胆

し、あるいは希望をいだきながらすごした闘病の日々を、私は今想い浮かべる。しかし君は、見舞客にはいつも和顔愛語の人、最後まで平常心を失うことがなかった。元来君は誠実と情愛に富み、人に愛される人徳を持っていた。それは天性のものであるが、敬虔なクリスチャンだったことも与つて力あつたであらう。「金と物」とが幅をきかせる今日、君はその他にもっと大切なもののあることを教えてくれた。

「山川は域を異にすれども、風月は天を同じくす」

人間に国境はないと、国際的、社会的活動を通し範を示した。今日、日本は佐藤君の如き人を育成しなければならぬ。我々は大切な人を今失った。

(ペシャワール会会員)

## 佐藤先生、安らかに

ペシャワール会事務局

辻 陸雄

佐藤先生、

私達は、佐藤先生を事務局局長にこの7年間、ペシャワール会の事務局をボランティアでやってきました。今では会員も海外を含め、日本全国で約1500名となりました。そして現地に日本人ワーカー15名とアフガニスタン人50名を擁する、日本でも一番着実に現地で医療活動を行っている民間の海外医療支援団



# ワイワイと集団訓練

ペシャワール・ミッシン  
ン病院理学療法士

島村教子

いつの間にか日の出が早くなり、水仙やスイートピーの花が咲き、春が近づいてきました。皆様お元気ですか。

スタッフとはようやく少しウルドゥ語らしき文体で話ができるようになりましたが、患者さんのパシュトゥ語はほとんどわからず、それでも一生懸命話しかけてくる人達に申しわけない思いをしています。

指の拘縮予防の訓練は、教えるほうもようやくいくつかのパターンを覚えてきたところですが。

## \*訓練にも現地の工夫を

少し前までは、初めにパラフィンで両手をパックし、温めて柔らかくしてから訓練を行っていました。なぜか次々と電気の差し込みスイッチが焼け切れてパラフィンが使えなくなり、今は水の中に二十分ほど手を浸してから油でマッサージをし、自動運動や自動介助運動を始めています。

本日はパラフィンのほうが、少し痛みがある人には効果的だし気持ちいいのですが、時々こんな方法もないと「家にはパラフィンがない——訓練ができない」ということになりかねません。油も初期にはワセリンを使っていました。この家にもある油（食用油でもなんでもいい）を使って指導したほうが安いし簡単に手に入ります。訓練用のソフトラバーが敷いてあるテーブルも善し悪しで、多人数をパッと見渡して教えるには便利でも、これも「家がないから」になりかねず、どこでも何時でも簡単に使えるところは本人の太ももの上というところで、「このテーブルも太ももの上も柔らかいから一緒よ」といっては太ももの上で手の訓練をしてもらっています。

## \*自主訓練の習慣化を願って

「部屋でも家に帰っても続けないとこん

な指になるよ」と指の欠けた写真を示すときもあります。続けてくれるかなという思いはいつもあります。（日本でも自主訓練というのは、わかっているもなかなかできない人が多かったのです。でも庭のベンチで日向ぼっこをしている患者さんのなかで、時々指の訓練をしている人をみかけるようになりました。どうかこれからもずっとそうして続けてほしいと願っています。

自分の体は自分で守るということをお患者さんだけでなく、自分自身にも言い聞かせながら過ごさず今日このごろです。

# 大きい言葉の問題

ペシャワール・ミッシン  
ン病院看護婦

松本智子

こちらへ来て四ヶ月が過ぎ、ようやく余裕が持てる(?)ようになりましたが、ことばの件ではやはり四苦八苦しています。

## \*緊急時、どう説明すれば

下腿切断を受けた若い女性患者の話です

が、手術を受けた翌日、その患者の件で何か問題があるらしく、「すぐ来てくれ」と同室者が呼びに来たのです。長い文章だとウルドゥ語もお手上げだ、ましてパシユトウ語だったらなおのこと、私一人で訪室しても理解できないだろうと思ひ、他のスタッフを捜したのですが、ちょうど昼の交替時で、すでに誰もいなかったのです。「困ったなあー！」と思ひながらもとにかく状態を見なければ…と思ひ訪室しました。同室者のウルドゥ語のわかる人を介して「おしっこが全くでない」「便器を当てて排尿を試みたが出なかった」と言うようなことがわかったのです。

その時患者は苦しんで泣いていました。下腹部を触ってみると緊満しており、もしこのまま出なかつたら導尿（尿道に管を入れて排尿を促す）しなければならぬのではないかと…。一瞬不安がよぎったのです。なぜなら、イスラム教徒の習慣上、女性は夫以外の男性（ドクターであっても不可、夫の許可があればOKの時もある）には自分の肌を見せないからです。女性同士であっても恥ずかしがつて見せようとしなかつたりします。こういう状況だから女性患者には女性スタッフが必要なのです。また余

談ですが、反対に私たち看護婦であっても男性患者の陰部周囲には触れてはならないのほかに、導尿の必要性を理解して納得してもらうには今の私の語学力ではとても無理だと思ひ、目の前が真っ暗になるのを必死でこらえ、同室者の協力のもとにトイレまで移送することにしました。ひとまず成功。本当に冷汗ものでした。



左から松本さん、藤田さん、島村さん(新病棟の落成式の時)

**\*現場では英語も無力**

PESHAWARへきて、英語が話せたら…ウルドゥ語が理解できるようになれたら…と常に思っています。今回の状況の中では、もし英語を話せたとしても現地のスタッフがいないかつたら（現地のスタッフは英語も話しますので、現地語を英語に訳してくれます）役に立たない言葉なのだと思います。思い知らされました。

現地へ来たら言葉は何とかなるということでもなく、私の場合、言葉に関する悩みは尽きることがありません。七月の帰国まであと数カ月間となりましたが、この先私はどうなるのだろうかという不安を抱きながら、今回はこの辺で失礼します。

**二ヶ月ぶりの「わが家」**

JAMS放射線技師 林 達男

一月三十日福岡を発ち、三十一日二十一時三十分（現地時間）イスラマバード空港に着きました。ロビーにシヤワール院長が出迎えて下さり、二ヶ月ぶりの再会で抱き

合つて喜びました。院長の運転する車で二時間三十分の夜道を走り、院長も嬉しそう  
で、中村先生との話が絶えません。二月一  
日に夢にまで見た懐かしのわが家へ着きま  
した。二階の部屋は美しく掃除がしてあり、  
ガスストーブが真赤にもえて温かく、シー  
ツは洗濯されてベッドの上に整然とそろえ  
てあります。シャワリー院長の我々を受け  
入れる配慮が窺えます。このように日本人  
を待つて下さるJAMSの方々がいること  
を感謝し、アフガニスタンの人達は何等か  
の手助けになればと思いを新たにしました。

### \*淋しいスタッフの国外流出

あけて二月一日九時に中村先生と共にJ  
AMSに行き、スタッフの皆さんに挨拶に  
廻り、皆様と抱き合つて再会を悦び、ウェ  
ルカムの連発です。顔の見えないスタッ  
プがいます、レントゲン技師のナビィがイ  
ランへ行つたそうです。せっかくレントゲン  
の撮影ができるようになり、十二月に開設  
されるアフガン国内のクリニックスに行くの  
だと張り切つてポータブル撮影の特訓をし  
ていたのに残念でなりません。家庭の事情  
があつたのでしょうか、単身でイランへ行  
つたそうです。元気で働くことを祈るのみで

す。

他に眼鏡をかけた美人の女医さんがカナ  
ダへ、検査室の大男がエジプトへ働きに行  
つたそうです。二ヶ月の間に五人のスタッ  
プが入れ替わつてさびしい思いです。永く  
腰をすえてこの仕事に打ち込める状況を作  
つてやる必要性を痛感します。それは、彼  
等の生活を豊かでなくとも、家族が明るく  
楽しいものであるように支えてやることに  
我がペシャワール会の責任だと思ひます。

### \*クリニック新設で増々多忙なドクター中村

中村先生は一日中多忙で、ミッション病  
院とJAMSを行つたり来たりで大変です。  
そのうえパキスタン北西辺境州政府との折



クリスマスで唄を歌う林さんと中村先生  
(こういうシーンはなかなかみられません)

衝、予算のやりくり、外国人の応対、来客  
の接待等大変です。さらにアフガンに開設  
した診療所の現地視察と指導に行くとのこ  
とで五日の五時に家を出て行き、八日に帰  
宅の子定が九日の午後帰つて来ました。現  
地では水の問題、明かりの問題、電気の問題  
等山積みして、そのうえなお、借家の修  
理までして来たそうです。現地の人達の協  
力に感心していました。このようなクリニ  
ックが充実し、各地に設立され、無医地区  
が解消されることを祈るのみです。

そのような働きによってペシャワール会  
の目的であるパキスタン、アフガニスタン  
の辺境地区のらいコントロール計画が達成  
される日の一日も早からんことを念じ、共  
に働きたいものです。

## 新しい病棟完成で多忙なスタッフ

ペシャワール・ミッ  
ション病院看護婦  
福岡徳洲会病院所属

藤田千代子

新しい病棟が完成し、入院患者を多数受  
け入れることができるようになりました。

今日から断食月に入り、数日前までに患  
者さん達は家に帰っていきました。しかし、

大勢入院していたせいか、今年は昨年より多く残っています。二月に手術件数が多く、余儀なく帰宅できない患者が多数です。

パキスタンでは女性は家族以外の異性の前にでないという習慣があり、新しい病棟でも女性部屋は二階の一番奥の部屋に隠しています。足底潰瘍やそのほかの手当も二階で行い、メインである一階のドレッシング室には降りて来ません。

一階の男性患者の手当を終え、さあこれから女性患者の手当で二階へ行こうとする頃にはくたくたに疲れており、女性患者の傷をよく考えながら手当したり、訴えを聞く余裕がありませんでした。そういうわけで（ほかに理由はあるのですが）昨年十月より私とサダーカット（現地の看護助手）とが女性患者の係となり、初めから二階へ行くようになりました。

### \*女性用ドレッシングルーム登場

毎日二階へ通いながらサダーカットといろいろ話し合い、女性のためにもドレッシング室が必要ということで、新しく完成した部屋の一つをもらいました。なんにもない部屋に、まず古いストローブをつけてもらい、カーテンをつけ、ワゴン車を入れ、足

を洗う洗面器を準備し、最後は一階のドレッシング室より器械棚を奪うようにして持つていき、二か月ぐらいかけてやっと、新しい女性のためのドレッシングルームが完成しました。

最近、この部屋を見て思うことは、何と男性と女性の扱われ方の差が激しいのだろう！ どれを見ても unnecessary ではありません。最低限、必要なものはあります。

私はこの病棟にきて一年はゆうに過ぎました。女性でありながら、これだけのこと、なぜもつと早く気がつかなかったのだろうかと自分の感性のなさにがっかりしました。

### \*「ヤーイシスター」の声に応え続けたい

朝、ドアを開いたまま、準備をガタガタ音をたてながらしていると、一人の患者がチラッと病室から覗き、そしてゾロゾロと集まってきます。そして、まだ準備が終わらないうちから「ヤーイシスター」（私によびかけている）「頭が痛い」とか「目が痛い」「からだが痒い」とか私が理解している、していない（パシエトゥ語なのでわからない言葉がたくさん）はおかまいなしに、あつちからもこつちからも皆が一斉に

訴えてきます。「ジージー」（はいはい）と言いながら、一人ずつ傷の手当をしていきます。そしてその患者の訴えが重要でない場合は、中村先生が作成された「ペシャワールで働く人のための手引き」にある必要な用語集の中から「ドオムラ、デル、ヤウゼイ、マ、ワヤ！」（そんなに一度に言うな！）を読みます。すると、私の発音がおかしいのか、迫力がないのか、くすくす笑い始め、今度は言葉（パシエトゥ語）を教えようと、さつきと同じように一斉にあつちこつちから話しかけてきます。

傷の手当と、訴えを聞いて観察するのと、言葉を教えてもらうのとで、頭の中はいっぱいになってしまいます。数少ない女性の患者たちの手当ですが、終わる頃はやっぱりくたくたです。しかし、これまで男性スタッフ（日本人のほかは全員男性）に言い辛かったことが多く、耐えなければならなかったことが多かったのだらうと思うと、言葉はわからないながらも聞こうとする態度を持ちたいと感じました。時には赤面するような婦人科の相談をしてくる患者もあり、私はただ、インシャラー（神様の御心があれば）と言って逃げます。

皆様もお元気で過ごしてください。

## ●ペシャワールの地を訪ねて

### 自分をさらし一歩踏み出す

元熊本地域医療  
センター看護婦

栗林由美子

その日、所用を済ませ時間までにはと走り込みましたが、既に会は始まっていました。

ドアを開けると中は薄暗くスライド上映が続いていました。席を探しておちつくと、人と人の背中や頭の間からトットツとあくまでトットツとお話をされている医師らしき男性のお姿が正面傍らにありました。

その時初めてペシャワール会というものを知り、ペシャワール会との本当の出会いの日となりました。それから数年間は会費を払



栗林さん(左)と岡本さん(ミッション・ホスピタル)

うだけでしたが一會員のつもりでいます。送られてくる会報を手にする度に、数年前のあの現地報告会のスライドとそれはオーバーラップしながら、少しずつ私の中ではより近いものとなっていききました。

#### ◆効率的はいついとか

ところで日々の身近な生活もそうですが、職場や社会をとりまく環境の変化する流れの中で、効率的で合理的であることが、「いいこと」だと評価されてしまうことへ疑問に思うことはいっぱいあります。昨日(3月4日)のことです。東海道新幹線に愛くるしいほどの名称で「のぞみ」というニュー新幹線がデビューし、こだまよりもひかりよりも速い時速270キロで、東京―新大阪間を2時間30分で走ってしまおうです。こんな狭い日本で、忙しくしてしまわないでもいいのにと考えたのは私だけでしょうか。便利さのメリットだけで押し流されてしまおうです。

色々と難しいことは分かりませんが、人が生きていく上で何を大切に、何に思いをたくしているのか、その人の気持ちを大事に受け止めながら、自分も又歩いていけたらと思います。

#### ◆さまざまな思いの中で

こんな私に、昨年10月ほんの数日間ではあ

りましたが、あのペシャワールの地へ同行しませんでしたの誘いがありました。

私共のような民間の病院で、およそ休日や10日間とるということは企業と違いまだまだ一般化されておられません。有給休暇は持つておりましたので、さっそく上司の理解と共に働くチームの協力を得るべく努力しました。

ペシャワールでの数日間があつという間に過ぎてしまい、何かと鈍い私には正直言って余り分らないままに終わってしまいました。これから、限られた期間の時間の中に存在としての自分を置くこととなります。多少さまざまな思いが私の中にはありますが、中村ドクターは「まず3ヶ月位でもやってみたら……」とのこと。心配事を又ひとつ増やすことになってしまおうのでしょうか……。

#### ◆自分をさらけ出し

何も持てる物を持ちえない「自分」というものをさらけ出し、相對峙する中でこれまで気づかずに見過ごしてきたことや隠れた思いの自分への問いかけになるかもしれません。不安もあります。

しかし、ペシャワール会の会の活動と中村ドクターの生き方、あり様に触れてみたく一歩を踏み出したわけですから、素直な気持ちでそれぞれに対応し、自分というものを確認していけたらと今は考えています。

現地の方々とうまく生きていけるよう、現地の方々に助けられながら、私でも出来るこ

とを考え実践していければと思っています。ベシヤワール会の皆様、どうぞご指導とお力添えをいただきますよう、宜しくお願い致します。

### 一度は行きたかった地

看護婦 岡本久子

人には、それぞれに一度は行ってみたいと思う地があるものです。私にとって、ベシヤワールは、行ってみたい地の一つでした。それが、去年実現して嬉しく思います。二週間という短期間ではありましたが、いろんな事を見たり、経験したりすることができ、よかったと思います。

### ◆子どもはどこも同じ

ライ病棟での中村先生の回診、藤田さんやスタッフの方々とのガーゼ交換、水曜日の手術、日曜日のフィールド・ワーク、宿舎でのウルドゥ語の勉強、それから、JAMSスタッフとの難民キャンプ診療など。

滞在中、印象に残ったのは、スタッフや患者さんの笑顔や心づかい、難民キャンプでの診察などです。診察準備をしていると、四方八方から人々が集まり、周囲を囲んでワイワイガヤガヤと、とても賑やかで、不安そうな顔、聴診器をあてられ神妙にしている顔、化

膿したり、裂創したりしている子供達の治療を始めると、思いっきり火がついたように泣きだしたりして、言葉にならない泣き声は痛いと言っているように聞こえました。その泣き声を聞いて、子供は何処も同じと驚いたり嬉しくなったり。それに、子供達の洋服の袖口が、テカテカと光っているのです。私にも小さい時に覚えがあり、そんな子供達をみると、おもわず頬がゆるんだりしました。でも、彼らはいへんな生活を強いられると思うと、深く考えさせられました。

### ◆視線にたじろぐ

埃っぽい道路には、車や馬車や人々が行きかい、郊外の風景は、とてもなつかしくゆっくりと時は流れているのに、生き生きと生活をしている人々、そんな中を歩いたりするのは、ドキドキ、ワクワクする反面、ホッとする感じがして、ベシヤワールの街は、とても不思議な所です。

バザールに行く時は三人で（藤田さん、松本さん、私の順）少し間隔をおき、一列に並び人込みの中を急ぎ足で歩きます。そんな私達は、異様に見えたかもしれませぬ。周囲は、ほとんど男性ばかりで「チーニ」「ジャパーニ」と、すれ違いざまに声をかけられたり、松本さんと二人で歩いていたら、わざわざバスが停止して、乗客の目は一斉に私達の方をみておりおもわず視線があつたりして。このような経験のない二人は、ギョッと

しまいました。

また、ベシヤワール博物館で見学中に、守衛の人から、「日本人か」と尋ねられ「ジー」と返事をする、「ウルドゥ語が話せるのか」とのこと。私達が知っているウルドゥ語というのは、せいぜい挨拶程度で「ジー、サラマレイコム、アッサムアレイクム、シェックリアの三つだけ」と返事をする、なんとなく喜んでいたりしていました。

帰国時は、一人で心細くもありましたが、二人の先生（シャワリー先生、中村先生）の介添つきという嬉しいような、恐れおおいような複雑な気持ちでした。

早いもので、六ヶ月がすぎようとしています。すが、つい昨日のような気がしています。

### 出合いと予感の中で

ベシヤワール会事務局 福元満治

中村先生のごことは、会の発足当時からマスコミを通じて知っていた。ベシヤワール会が催した映画会にも行ったことはあった。その時は、グルジェフの映画とベシヤワールという地名やその会の活動がうまく結びつかず、何やらチグハグな印象を持ったことを覚えてる。特に「ボランテア」などという言葉を知ると、自分の底に眠っている悪意がもぞもぞと頭をもたげてる類の人間である私に



ドクターシャワリとテメルガールの診療所の前で

は、その時の会の熱気を含めて、自分には縁なきこととしか感じられなかった。

そんな私が、ある時中村先生のエッセイを新聞で読み、体の血がザワザワと騒ぐのを覚えた、まるで啓蒙(けいもう)のように。私はその文章に強く触発され、一冊の本に纏めたいと思った。正直に言うと、(この人の本は俺が出版する！他の奴には出させない)という気持ちだった。のぼせ上がった言い方だが、そんなことは初めての経験だった。

あとで冷静になって考えると、私は中村先生に嫉妬したのだと思う。何に嫉妬したのか今ではよくわかるが、中村先生のアフガニスタンの人々との関係のあり方、その深さに嫉妬したのである。ひとは、他者とこれほど深く関わりあうことができるのか——日本の高度消費社会の中で、心動かされることもなく

日々をやりすごしつつある自分にとって、中村先生の文章との出会いは、やはり運命的だった。

私は中村先生の本を出版したいと考えたが、矛盾した気持ちに捉われていた。つまり中村先生を支援しているペシャワール会とは、出版社としてのみ関わろう、しかし、中村先生とは、単に著者と出版社(編集者)という関係だけではすまなくなるだろうな、と。そしてそれはある(なんか、深入りしそうだ、というような)予感でもあった。

### ◆迷宮へ

あれから五年たち、去年の秋十月には、ペシャワールのバザールで、中村先生、林さんの三人で、カバブを喰いチャイを飲みながら、道行く人々をながめていた。十月十三日から十九日までの、正味一週間の短かい滞在だったが、夢のように濃密な時間だった。

空港からミッション・ホスピタルの宿舎に到着するとすぐに、街に出かけた。路上の片隅でヒゲを剃る床屋、行き交うタンガ(馬車)にリキシャー、その中を行く援助物資としての日本製四輪駆動、そして旧約の時代さながらにふいに現れるロバに乗った少年。私は看護婦さんたちの夕食のためにトマトやオクラやキュウリを買い求めて、バザールをうろろするうちに、迷宮にはまり込んだ。三時間あまり、方向感覚を失いながら、それでも好奇心だけは旺盛にぐるぐる迷路を歩き廻

### ◆抜きさしならぬ処に

翌日からは申訳ないほど密度の濃い日々だった。らい病棟での中村先生の回診同行、JAMS訪問、女性患者のらい病棟訪問、終日患者さんの手術を見学、JAMSスタッフと難民キャンプのフィールドワーク同行、テメルガール診療所訪問・一泊、そのあい間にバザールで野菜やチキンの買い出し……。

それは、患者さん(難民)に会い、中村先生や藤田さん、そしてJAMSのスタッフの苦闘と困難を、垣間みただけの一週間ではあったが、私たちの日本の活動が、確実にこの地の人々と繋がっているということを実感する旅だった。

私は、ドクター・シャワリやJAMSのスタッフにむかって口走っていた。

「私たちペシャワール会は、常にあなた方とあなた方のプログラムのことを考えています。私たちは私たちに出来るあらゆることを、日本国内において行います。」

私は自分が抜きさしならぬ処に立たされているのを感じた。中村先生のエッセイに初めてふれた時の、あの予感が適中してしまっただけだ。

ああ、インシャッラー(神のご意志ならば)。

●ミッション・ホスピタル新病棟完成セレモニーに出席して

「すばらしい」そしてこれから大変だ

宇治徳洲会病院医師 板垣徹也

ペシャワールに行ってきました。

新しいライ病棟ができあがったので、完成セレモニーをミッション病院のウジヤガー院長が開催することになり、病棟建設の一部に徳洲会の資金援助があったので、招待されたためです。招待を受けた人々が大変多忙のため、残念ながら訪問出来ず、代理に私がペシャワールに行ってきました。

\*やはりショーでした

5年前にも、ペシャワールに行きましたが、この時も、お二人で行かれる予定のところお一人の都合がつかなくなり、代理に私が行きました。5年たつて同じパターンで行くのも何かの因縁だろう、等と、実は喜んでいたりしました。

セレモニーは北西辺境州のXX大臣、XX大臣、チャリティ団体協議会(??)事務長、といったお歴々が出席され、新聞記者や病院のカメラのフラッシュがまぶしいもので、後で中村先生が患者達に?ルビーが贈られたと教えてくれました。セレモニーなのでショーなのはあたりまえなのでしょうが、やはりショーでした。

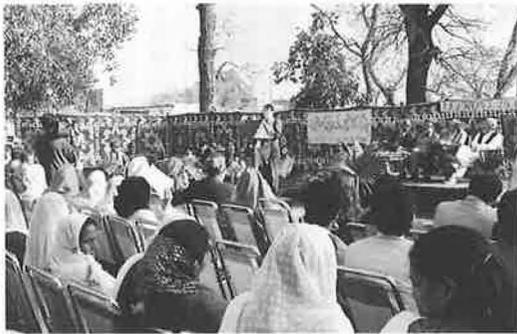
フアウ先生のスピーチが(内容は全く解りませんでしたが)聞けたのは大収穫でした。式の後のパーティでミールして写真を写させてもらいました。

5年の間に、ライ病棟は20床から70床に増え、昔のALSはJAMSと名前をかえて、50名のスタッフを抱えていました。病院ができて、テメルガールに診療所ができて、アフガニスタン内部のドラエ・ヌールの診療所も本格的な活動体制に入ったとのことです。着々と実現していくことになだ「すばらしい」と思いました。と同時にこれらが益々大変だとも思いました。

\*ペシャワール・ナイト

さて、以上はペシャワールの光の部分・昼の世界ですが、当然裏の影の部分・夜の世界があります。Night life in Peshawarでは、もちろんアルコールのない環境のため目くるめくような体験はありませんが、毎日確実にやってくる「停電」があります。暗くなつてから、大体時間がさまっているようですが、突然電気がとまり部屋も道路も信号まで真っ暗になってしまます。手慣れた様子で、中村先生と林さ

んは蠟燭を灯します。火は人に安心感を与えます。中学校の教科書で習った「蠟燭の話」など思い出します。一つの炎を真中にしてみると、昔の話や、これからのこと、人々の噂話が始まり、続いていきます。時には少し艶のある話の片鱗もないことはないのです。アラビアンナイトならぬペシャワールナイトです。中村先生と林さんと灯を囲んでいると、れんげの花のはなし、葉の花がペシャワールの北の方で咲いていたこと、米は自国でつくるべきだ、蜂蜜を集める人は南から北上して北海道に至るとか、セイタカアワダチソウは養蜂家の人々が日本中に広げた、ペシャワール会の人々はなぜかユニークな人が多い、信号がついている時



新病棟完成のセレモニーで挨拶をする板垣医師

でも警官の指示どおりに交差点を曲ると衝突事故になり、アフガン難民の人も段々と帰郷しているが夏の間は昔のキャンプにもどつて暮らす人もいます、国連の援助も今年で打ち切りになるだろう、活動を続けるのにやっぱり資金がいるけれど、ボランティアをしてもらう人々の滞在期間中や帰国後の身分が不安定なこと、自分達の働く病院もなかなか大変だ、トコズレに高圧酸素療法が効くらしい、とすれば「うらきず」にも効かないだろうか、一度試して見る必要があるな、小型の機械はないものだろうか、国連推薦の高圧治療器を考案したらどうだ、そろそろ腹がへりましたね、食べるものはドラエ・ヌールではどうですか、一週間も二週間も風呂に入れないとさすがにまいます、現地の人も風呂に入るようになれば皮膚病も減りましょうね、水はあるとですよ、太陽熱では暖まりませんが、昔あったようなビニールだけの温水器なら湯がでできりゃあしませんか、日の光は沢山ありますから、今度やってみましょうか。

こうして暗闇の中から、いくつかのアイデアが生まれることもあり、5年後には「あつ」と思うことがあるかも知れません。昼のペシャワールとともに夜のペシャワールもまた、歴史を作っているのかも知れないなどと、考えている間に停電が終わりました。

●増補版『ペシャワールにて』を読んで——阿部謹也

## 世間意識からの解放

◆自分を愛えよという意志がないところには真の国際化はない

### ◆現代世界の焦点

私はまだペシャワールに行ったことがない。蒼穹に白い頂を屹立させたヒンヅークシの美しい山々も見ることがない。アラブのバザーも知らない。それなのに本書を読んでみるとあたかもペシャワールのJAMSの病院で患者の膿みをとりに、ときにバザールでカバブーを買っているような気にさせられる。

どんなに小さな町でも村でもそれなりに世界の縮図ではある。しかしペシャワールは文字通り現代世界の焦点といってもよいだろう。ここには自分たちの文明の普遍性を標榜している欧米先進諸国が奉仕という形式のものでその傲慢な素顔を見せているし、現代日本の旅行者や若者も現在の日本の病める姿をさらけ出している。旧ソ連やアメリカの露骨な干渉が何のために行われたのか、住民は日々肌身で感じとっている。国連難民高等弁務官という地位や国連という名が日本では海外協力部の錦の御旗にされているが、その実態がどのようなものであるのか住民はつぶさに知って

いる。ここには明治以来百年日本人が自分の目にかけてきたサングラスあるいは鱗を払い落とすすべてのものがある。

ペシャワールに思いを馳せるとき、私はまた東京・福岡という回路を通して考えてしまう。私は中村氏が糾弾している東京に住んでいる。そして年に一度福岡に行くことを楽しみにして月日を送っているといっても過言ではないだろう。それが何故なのかこれまで余り考えたことはなかったが、中村氏が生まれペシャワールの会がつくられる福岡を考えてみるとそこには何らかの関連があるような気がする。

### ◆国際化とは異質との接触

一昨年と昨年私はドイツで国際学会に出席し、昨年は「日本の世間と西欧の社会について」講演をした。そのときマレーシア出身の学者が日本の世間という概念にたいへん関心を持ち、マレーシアでもその話をして欲しいといわれたことがあった。その前の年に私はこれまでの日本とヨーロッパ・アメリカとい

う構図だけでなく、東南アジアそのほかのアジア諸地域を含めた歴史認識を形成してゆかなければならないと考え、明治維新に関する東南アジアの学者たちと日本の研究者たちとの大きな違いについて考えるべきだということを岩波書店の『よむ』という雑誌に書いたことがあった。

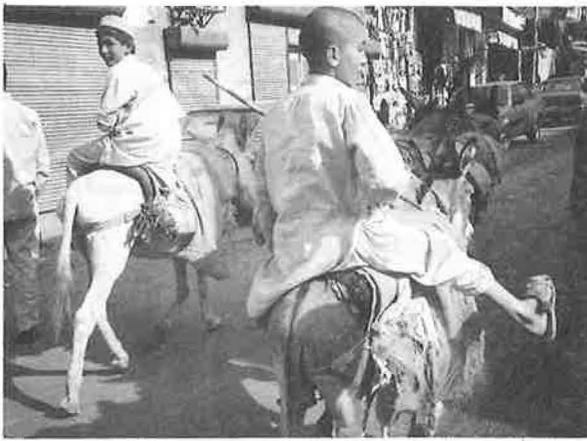
しかし本書を読んでいるとこうした問題のすべてがペシャワールでは明瞭な形で現れているように思える。国際化という言葉が叫ばれて久しいが、かねてから私は国際化とは異質な文化（人と人の関係のあり方）の中に自分の文化（人と人の関係のあり方）と共通な基盤を発見し、そこから互いの文化の違いが生ずる経過を現在まで辿ってくる作業だといってきた。中村氏は文字どおりそれを実践されている。国際化とは異質な人々と接することによって自分が変わってゆききつかけをつかむことでもある。自分を変えようという意志がないところには真の国際化はない。西欧のミッションや国連の事業がうまくゆかない理由の一つにはこの問題がある。

最も重要なことは現地に長く滞在し、そこで何が求められているのかを把握することなのだ。このようなことをこれまでどれほど多くの人や公的機関がおざりにしてきたことか。インテリを代表とする近代文明の担い手たちが、自分たちこそ知の最先端にいてという幻想にとりつかれてからこのような事態

が始まったのである。それはヨーロッパではほぼ一六世紀に始まり、日本ではこの百年の間の出来事である。

### ◆近代化と偏見

「らい」をめぐる偏見についての本書の指摘はまさにこの問題とかわわっている。中村氏は「らい」をめぐる偏見が近代化に应じて強くなり、科学的知識の普及につれて差別も無慈悲なものになってゆくことを指摘している。北西辺境州やアフガニスタンでは患者も共同体に一定の席を割り当てられているという。感染という科学的な概念が普及すると



バザールをロバで行く少年たち

「うつる」というメカニズムが精神的なものを媒介することなく人々の頭脳に定着し始め、差別が激しくなったという。

「近代化とは中世の牧歌的な迷信が別のものともらしい科学的迷信におきかえられてゆく過程であるに過ぎない」と中村氏がいうとき、ルーマニアの亡きルネサンス研究者クリアーノのような現代の学問の最先端の人々がようやく気づき始めたことを中村氏はすでにペシャワールで自らの体験の中で確認していたのである。

現在日本でも外国人労働者に対する差別が激しくなっているが、このような状況の中ですら日本史家たちは「らい」に対する差別や「らい」の存在さえ日本の学生は知らなくなっていると嘆いているにすぎない。専門の学者ですらこのような状態であるから、日本では部落差別や外国人労働者に対する差別を自分の外の出来事として捉えようとする風潮が強い。私は部落差別の問題は部落以外の人々の中に今も強く残っている世間意識がある限り、容易には解消しないと考えている。しかしこの世間意識に対する関心はほとんどゼロに等しい。

### ◆世間と個人

日本のインテリは社会という言葉を容易に使うが、社会は個人を単位として成立している建て前になっており、自立した個人の存在

を前提としている。しかし日本ではその程度の個人もいまだ十分には存在しておらず、今後も西欧的な個人が定着する見通しはほとんどないといってよいであろう。にもかかわらず西欧風個人を前提にしてすべての概念が立てられているところに問題がある。世間とはそれぞれの個人がもっている人間関係の絆であり、郷土や出身校、会社、などの中でそれぞれが独自に結んでいるものである。一人一人の世間は従ってそれぞれ異なっている。世間は個人以前に存在するものと考えられており、個人が世間を変えることが出来るとは誰も考えてはいないのである。しかし世間は個人にとっては実在であり、皆が世間を意識しながら暮らしているのである。その世間そのものは排他的で差別的な構造をもっており、私達の差別的な言動の根源に世間という枠がある。そして世間意識の存在に気づかないが故に私たち自身の差別的言動にも気づかないのである。

本書は私たちがこのような世間意識から解放し、「らい」を病むことだけが人間の平等の印でしかない「世界を見せてくれる。このような世界を見た人の言葉を私たちは信じなければならぬ。本書を読むことによつて私たちがどのような絆で結ばれているのかをも自問することになるだろう。」

(一橋大学教授・西洋中世史 ペシャワール会会員)

# 人 + 泥 + 神

انسان  
زمین  
خدا

文・画 甲斐大策

## カーペット

アフガニスタンの旅から

アフガニスタン北辺の小さな町、アクチヤのカーペット屋で、街道に面して開け放たれたままの広い間口から舞いこむ綿雪を額に受けたりしながら、掘りごたつの中に下半身を温める。

「これは、ロシア革命前のサマルカンドのもの、こっちも同じ頃のタシケント、八十年少々たってますかなあ。こことここ

が駱駝の毛、地には絹をつかって、そこには金箔が残って……」

おやじさんは、古いカーペットをしきりにすすめる。

彼の地の人々がカーペットに寄せる愛情の強さは、私達の想像を絶する。私達の社会での家そのものと考えてもよい。

女房と取り替えても、との表現があるが、良く考えると女房がどんなに貴重な存在を示している、などといえれば今日、一部のフェミニスト達から袋叩きにあうのは眼に見えている。女性を品物と同じに考える封建時代の遺産、と眼尻を吊り上げた御婦人方の顔が見える。

それはともかくとして、アフガニスタンやその他西アジア、特に移動民系の血をひく人々の社会では、まさに女房と同じ程に、そして女房はある男にとって生命をかけるだけの存在なのだから、その者の生命とも同じ程に、カーペットに執着する。

### 移動民の生活に根ざって

日本でも、家屋の洋風化にともなってカーペットの需要が増してきた。床を飾るのは室内空間美化の最大要素とばかりに、各

種敷物の商戦も激しい。

イラン人、パキスタン人、アフガニスタン人のカーペット商人が今の日本に何人いるのか、巨大商社の資本もからんで、各地にカーペット屋がショールームを出し、展示会を催し、セールスが盛んである。

カーペットは、有史前からの歴史をもつ。移動民族の生活に根ざした最大の文化である。

布には、織り、編み、ねり、と三種の製作過程と組成があるといわれるが、カーペットはそのいずれでもない。

タテ糸に各色の別の糸を結びつけ、それがタテ糸の本数分横列に揃った時、押さえる目的でヨコ糸が入り、地の部分に結果的に織りの要素が入るのである。カーペットは、横列の結び目が何列も重なるうちにつきり出す平面なのである。

各民族から部族、そして家族へとそれぞれ独自の伝統的なパターンをもっているが、定住性と工芸性の強いペルシャ系、移動のための頑丈さと泥の色にじかになじむトルコ系と大別できる。

いずれにしても、上等品ほど毛足は短く刈りこまれる。

「靴の先が見えなくなるような……」と  
 ヨーロッパの高級な生活の表現の中に登場  
 するカーペットは、冷たく湿度のある泥や  
 石の床に毛皮を敷いていた人々の価値観で  
 ある。

### 華やかで暖かな世界

アフガニスタン北部の伝統的  
 なチャイハナは、カーペットの  
 展示場のようなものである。床に壁に  
 柱に、その店の主人が誇るコレ  
 クションが、様々な取り合わせ  
 で、青空と泥だけの二色の間で  
 旅してきた人間に、夢のような  
 華やかで暖かな別世界を用意し  
 ているのである。

大地や泥造りの床、石を敷き  
 詰めた床に坐ると、人間のひ弱  
 な存在を尻の下から思い知らさ  
 れているようで落ち着かない。しかしそこ  
 に一旦カーペットが介在すると逆に、大地  
 からの不動の安定感を伝えてくれる。  
 カーペットそれぞれが、その上の空間に  
 つくり上げる小宇宙をもっている。

一家が代々愛用し、またはやっとの思い

で手に入れた自分用のカーペットを扱われ  
 ば、その場が世界のどこであろうと、自分  
 だけの空間が生まれるのである。その中に  
 入ると空翔ぶカーペットの発想が良く理解  
 出来る。

私達の生活にもそんな空間がなかったわ



けではない。花見や運動会で扱げたゴザオ  
 リジナルは、畳の部屋の感触と匂いがその  
 まま異なる空間に持ち出された気がして、  
 一方で外界にいる解放感があつて、華やい  
 だ心になったものである。ビニールの敷き  
 物では、足下の湿気を断つ目的以外、何ひ

とつ心にうったえる空気は生み出さない。

今日、パキスタン・ペシャワールのカー  
 ペット市場には、遁れてきた難民達が何か  
 の思いでロバの背にくくりつけてきた父祖  
 伝来の名品が数多く姿を見せている。

商人達は、流入する難民の心情や境遇に  
 一片の同情も示さない。ここぞと容  
 赦なく買い叩く。しかし、売る側にも、  
 感傷的な心は見えない。とこと  
 ん、カーペットの質を主張して、そ  
 れなりの代金を要求する。

「このクラスだと、まだ百年近く  
 使えます。今が一番いい状態だけだ  
 ね」

商人が手にしているカーペットは、  
 すでに六、七十年使いこまれた上等  
 品で、一本一本の毛の先端が、虫眼  
 鏡で見ても赤ん坊の最初の毛髪のよ  
 うに自然に細まっている。

本物の文化は、それに接する人間の品や  
 格を実的確に測るものである。私は、物  
 すごいカーペットの上に坐すたびに、幸福  
 感の一方で、たじろぐのである。

(石風社刊「神\*泥\*人」より)

●事務局だよ

\*アフガン問題が久々に新聞の一面に登場して来ましたが、ペシャワール現地からみると、それはあくまでも「上澄みの動き」(中村先生談)ということのようです。旧ソビエトやアメリカ(国連)の影響力が後退して、事態は「自然な」力関係のなかで推移してゆくということでしょうか。「すべては政治的シチュエーション次第だ」と語ったドクター・シヤワリの言葉が思い出されます。ただ、「政治」のそれよりは人間の「生」の幅や深さの方が、はるかに広く深いのだということを忘れぬようにしたいと思います。なおペシャワールには反政府ゲリラ各派の事務所がありますが、市内は平穏でJAMSのスタッフも日本人ワーカーも落ちついて仕事をしているとのこと。アフガニスタンに真の平和が訪れると、グラエヌールをはじめとする無医地区での、クリニックの展開の必要性はますます高くなってゆくことと思います。平和の戦線拡大にともない、私たち日本側の補給も拡充しなければなりません。より一層のご協力をお願いいたします。

\*昨年任期を終えた石松義弘医師は、東京での産婦

人科研修の後、この二月からカンボジアのクサイ・カンダール郡の郡病院へ赴きました。SHARE(国際保健協力市民の会)からの派遣です。あのトットツとした感じのまま村人のために健闘されることと思います。お体くれぐれもお大事に。

\*中村先生の報告会・ペシャワール会総会  
日程の決まっている所をお知らせします。なお中村先生の報告会を7月、8月にご希望のグループは、事務局までご連絡下さい。

・7月11日(土)東京  
・7月18日(土)熊本市  
・7月25日(土)ペシャワール会総会・福岡市  
・8月22日(土)・23日(日)関西(八尾十一ヶ所)  
・8月29日(土)北九州市小倉

\*亡くなった佐藤雄二事務局のあとを受けて、村上優氏が事務局長に就任いたしました。村上氏は故佐藤先生の同僚(国立肥前療養所)で、中村先生の友人でもあります。抱負・人柄等次号で紹介いたします。

〔お顔い〕当分の間、郵便振替と手紙は従来通り福岡YMC Aペシャワール会宛でお願いします。

(〒810 福岡市中央区天神一丁目10-24 福岡三和ビル4F 郵便振替 福岡9-6559 ☎六一七四〇)

●アジアの辺境から放たれた痛烈なメッセージ  
●増補版  
ペシャワールにて

中村哲著 四六判上製二六〇頁 価一八五四円

● 癩(らい)そしてアフガン難民

ペシャワールについて語ることは、人間と世界について総てを語ることであると言っても誇張ではない。貧困、富の格差、政治の不安定、宗教対立、麻薬、戦争、近代化による伝統社会の破壊、およびその発展途上国の抱える悩みがここに集中しているからである。悩みばかりではない。我々が忘れ去った人情と、むきだしの人間と神に触れることができる。

(著者「あとがき」より)

せきふうしゃ  
石風社

福岡市中央区大名1-2-15  
電話092(714)4838 振替福岡4-25227

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は一口年額三、〇〇〇円、学生会員一口一、〇〇〇円、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 毎年の改選は毎年総会にて行う。役員の一回国会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑨ 本会の事務局をFARA HOUSE (〒八一〇 福岡市中央区大名一丁目一〇一 二五上村第二ビル三〇七号 ☎七三二二 三七二) 内におく。

一九九二年四月初め、ラマザン（断食月）あけの祝日を控え、ペシャワールでは人々の間に何かを待望する空気が満ちていた。それが漠然としたものであっても、明らかに一つの時代の転換を誰もが意識していた。国連の音頭による、不可能なアフガニスタンの「総選挙」を間近に予定し、また「何かある」と予感されたばかりではない。すでに一九九一年の末ごろから、巷には終末的な救世主到来の噂さえ囁かれ、戦闘はあちこちで影をひそめつつあった。大部分の人々は、「党派・非党派」という明快な二分法であらゆる動きを受け止めていた。百数十万人の死者と六百万人の難民を出した十数年にわたる内乱の果てに、多くの難民に共通していたのは一種の諦観にも似た政治不信と疲労の色であった。だれもが政治的スローガンで踊らされる愚かさを身に染みて感じ、平和を切望していたのである。果して四月中旬、「アフガニスタン」が再び紙面をにぎわせ始めた。日本国民の中には、もうアフガニスタンなぞ昔の話で、難民が今もって居たのかと驚く向きもあった。

だがアフガニスタンが世界を沸かせたのは、一九七九年のソ連軍進攻以来一度ではない。ソ連軍撤退前から、我々JAMS（日本—アフガン医療サービス）は諦めの気持ちで「伝えられざる人々の現実」をつぶさに見てきた。一九八八年の時も、世界中が今にも難民帰還が実現するような誤った報道で沸き返ったではないか。しかし、米ソの武器援助は続き、混乱はさらに拡大した。アフガニスタンはソ連・米国・中国製と、まるで地上戦の中小火器の巨大な国際市場の様相を呈した。そして、莫大な金を浪費した国際援助ショー、「難民帰還計画」もまた、山師的なプロジェクトの横行の末、事実上終息した。殺到した百団体以上の欧米援助団体は閉鎖された。軍靴で踏みじられた人々が、今度は援助の名の下に札束で頬を殴られたと感じたのは当然とも言える。

和平の動きは、人々が自分で勝ち取ったものである。確かに冷戦の余韻という点から見れば、今年一月の米露の武器供与停止が重要な意味を持って見えるが、実は戦に翻弄された人々のこの無言の圧力こそが、政治勢力の跳梁を封殺する底力をなしているのである。

王政復活による再統一という米国のシナリオは今回の事件で見事に頓挫した。アフガン戦争が冷戦構造における米ソ衝突の象徴であったとすれば、現在の動きは冷戦後の米露の無力の象徴である。国連の姿もそうである。今やできることは、かろうじてナジブラ元大統領の安全を確保するのみであった。国連の権威と信頼感は名実ともに失われた。紛れもなく、一つの時代の終焉であった。

「米ソ冷戦構造の崩壊と民族主義の噴出」という単純な脈絡では現地を理解できない。もともと中央アジアにはヨーロッパ的な民族主義や国家観は存在していなかった。イスラム自体が一種のインターナショナルリズムを基調としており、カスピ海からペシャワールまで、割拠性を持ちながらも人々はムスリムとして同一性を自覚するのが普通であった。日本人はこの事実を余りに過小評価している。米国のてこ入れによって深刻化した政治党派の乱立も下々には無縁で、多くの者には党派を超えて働く血縁関係の方がもっと身近であった。大部分の声なき人々は、何かの主義や思想で動いていたのではない。自分のアイデンティティを打ち壊す外からの脅威から郷土（国土ではない）を守る単純な動機で戦い、そして戦いを拒否しているのである。

このような平和へのうねりこそ、冷戦後のアジアの民の健全な反応と言うべきかもしれない。ペシャワールの欧米人の間では、ごく最近まで、国連軍の進駐こそが唯一の道だともことしやかに説かれたものである。だが、国連の威信は完全に地に墜ち、戦火に痛めつけられた人々の平和への切望こそが強大な力であることをアフガニスタンは実証しつつある。もはや紆余曲折はあっても、この基本的な流れは変わらないだろう。

翻って日本を見れば、PKOと並んで戦争責任の論議がかしましい。一九七九年のソ連軍進攻から今回のできごとまでが断片的に我々の頭の中でつながり、国連の役割が過大評価されているとしたら、そら恐ろしいことである。当事者たる米ソがアフガニスタン難民に謝罪したとは寡聞にして聞かない。国連が無策を反省したとも聞かない。

たまたま現地に長く居て現実と日本側の認識のずれが分かる訳で、同じことが他地域の理解でも生じているとすれば、我々はもう一度、自分の持つ国際的認識を問い直さねばならぬことになる。アフガニスタンを「知られざる民の現実」と呼ぶならば、日本という「知られざる民の現実」をも顧みざるを得ない。